

「特別講演-2」

チンパンジーから探るヒトのこころの進化

京都大学霊長類研究所

友永雅己

私たち人間のこころは、進化という時間の中ではぐくまれてきた。そしてもちろん生まれてから死ぬまで常に変化し続けている。「ヒトのこころはどのように進化してきたのか、そしてそれはなぜか。」比較認知科学はこの問いに答えようとする研究領域だ。今回の講演では、主としてヒトにもっとも近縁なチンパンジーを対象とした研究の一端を紹介し、比較認知科学が先の問いに対してどのような答えをもたらそうとしているのかを示したい。また、近年精力的に進めている、まったく異なる環境に適応してきた他の哺乳類を対象とした比較研究についても言及し、こころの進化の多様性と環境適応の関係について概観する。

トピックとしては、以下を予定している。

(1) チンパンジーにおける顔の認識：ヒトを含む霊長類にとって顔は社会生活を送る上で極めて重要な情報源である。チンパンジーがこのような顔刺激をどのように知覚・認識しているのかについてこれまで行ってきた研究を紹介する。

(2) 視覚世界の認識の種間比較：樹上環境に適応したチンパンジー、陸上環境に適応したヒトとウマ、そして水中という環境に適応したイルカという多様な哺乳類を対象に彼らが視覚的な世界をどのように知覚・認識しているのかについて、特に形の知覚の問題に焦点を当て分析した研究を紹介する。

(3) 数の認識の種間比較：数は、人間の高次の知的活動の産物ではない。ヒト以外の動物も積極的に数という属性を行動選択の手がかりとして自発的に利用していることが明らかになっている。ここでは、チンパンジーやウマで行っている数の認識に関する比較認知科学研究の成果を報告したい。

これらのトピックを通して、比較認知科学研究の現状と今後の展開について考えていきたい。